

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 10 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370806

研究課題名(和文)近代日本の植民地における自然災害と防災についての研究

研究課題名(英文)Study on the natural disasters in the Chosun peninsula under the rule of Japan.

## 研究代表者

山崎 有恒 (Yamazaki, Yuko)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：00262056

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は日本植民地下の朝鮮半島を対象とし、当該地域の災害対応・防災の実態を探ることによってこの分野における近代日本の「結論」を読み解こうとしたものである。朝鮮半島で頻発した大水害は、長年の山林火災によるはげ山化が主要因であることに気付いた朝鮮総督府官僚たちが、その対策を講じていった。そしてその中で近世朝鮮王朝の抱えていた闇に気づき、その問題の抜本的な解消に尽力していったが、それは大変な道のりであり、これまでの歴史を再構築するに等しい大難題となって彼らにのしかかっていった。それでも彼らがあきらめなかったことが、次なる悲劇をもたらし、そうした連鎖は最終的に日本の満州国支配に至ったのである。

研究成果の概要(英文)：The purpus of this study is to throw the light on the disaster of the chosun peninsula under the rule of Japan. Most of the flood damages occured owing to ruin of woods. Many people riving in the woods called KADENMIN burned woods. The government officers knew that. So they made efforts to give farmlands for KADENMIN but it coused many problem.

研究分野：人文学

キーワード：植民地 朝鮮 歴史 自然災害 火田民 防災 土地調査事業 間島問題

### 1. 研究開始当初の背景

近代日本の植民地に関する研究は数多く存在するが、その多くが支配被支配をめぐる政治的な問題に集中し、社会・風俗・文化等の検討を通じて「植民地とは何か?」という問題に迫ったものはあまり多くない。

また近代日本の自然災害や防災についての研究は、その多くが理工系分野の技術的研究、ないしは地理学分野による GIS などを用いた研究が主流であって、そうした問題についての人々の意識や行動を歴史的にアプローチしようとするものはそもそも僅少であった。しかもそうした歴史学的研究の大部分が日本国内における事例を対象としたものであって、近代日本の格植民地において、自然災害や防災がどのように構築されていたのかを対象とするものは管見の限り、皆無といってもよい状況にある。

しかし「本国における歴史的経験はすべて植民地に反映される」という指摘があるように、日本国内における災害対応の一つの「結論」を見るためには、植民地における災害対策の事例研究が不可欠であるとの結論に至った。

### 2. 研究の目的

本研究は日本の植民地支配下にあった時期の朝鮮半島を対象とし、(1) どのような自然災害が起きていたのか、(2) そうした災害に対して、朝鮮総督府をはじめとする関係諸機関の人々はどのような対応を行っていたのか、(3) そうした対応はその後どんな問題や植民地経営上における困難を惹起することになるのか、(4) そうした災害が発生する原因の内、植民地特有の事情に起因するものはあるのか、(5) 支配されていた朝鮮側の人々は、この問題についてどのように考え行動していたのか、の諸点を明らかにすることを目的としていた。

そしてそうした研究を通じて、近代日本が組み上げてきた防災対策、災害対応の、ある種の「結論」を読み解くと共に、そうした内地の政策や技術の導入が、植民地経営にどんな困難やトラブルを巻き起こしていくことになるのかを明らかにしようとした。

### 3. 研究の方法

(1) 研究は、まず植民地期朝鮮で起きた自然災害に関するデータベースの構築から始まった。そのために研究代表者のもとに、若手研究者、大学院生、学部生から構成される「朝鮮歴史災害史両研究会」を組織し、植民地期朝鮮で発行されていた日本語新聞である『京城日報』から災害記事を抜き出し、それをデータベース化する作業を行った。想像を超える災害の多発により(特に水害の頻発度、規模の大きさ、被害の大きさは想像をはるかに超えるものであった) 予定よりもその作業は手間取ったが、研究期間終了までに当初予定の八割程度に関しては、データベースの構

築に成功した。

(2) 次に朝鮮総督府の発行した様々な記録類、作成した資料群、そして『朝鮮総督府月報』、また『朝鮮公論』などの準公的な雑誌類なども用いて、そうした災害に対する植民地関係者の意識や行動を拾い集める作業を行った(なおその多くが韓国高麗大学の民族文化研究所に所蔵されており、同研究所には大変にお世話になった)。

またかつての朝鮮総督府官僚たちによって戦後結成された友邦協会(比較的近年に解散し、史料の大部分が学習院大学東洋文化研究所に引き継がれている)についても調査の手を伸ばした。この中には、実際に火田民対策の中心人物となった官僚の改装が残されており、研究を進めていく上で極めて大きな役割を果たした。

国立国会図書館憲政資料室には、朝鮮総督齋藤実の個人史料が大量に所蔵されており、また水野錬太郎をはじめとする多くの植民地官僚たちの史料群も保存されていた。また横浜開港資料館には朝鮮の政務長官を務めた有吉忠一の文書群がある等、国内の諸資料館に史料が散在しているため、それらを出来る限り網羅的に調査して、朝鮮の自然災害に対する官僚たちの意識と行動を知る手がかりをたくさん収集することができた。

(3) さらに朝鮮に渡航した一般の人々により記された回想録の類もできるかぎり調査・収集を試みた。こうした史料群の存在や活用価値等については、高麗大学アジア問題研究所イ・ピョンシク准教授からの示唆によるところが大きい。そしてこうした目的のため、渡航者を多く輩出している地方の中央図書館へはなるべく積極的に訪問調査を行った。これは国会図書館では得られない貴重ないくつかの史料との出会いをもたらした点で極めて有効な研究活動であった。

(4) 上記の研究作業の成果を踏まえ、植民地期朝鮮の災害対応について研究を進めていくうちに、次の項目で詳述するように、この問題が当時中国で発生していた、いわゆる「間島問題」と密接にリンクしていることを知った。そしてその結果として、朝鮮総督府と外務省が深刻な対立関係にあったことを知り、調査の手を外務省外交資料館や国立公文書館などにも広げた。

(5) 以上様々な研究活動を行い、その成果を学会での報告や論文の作成に結び付けるべく、研究の整理と統合を行った。これについては現在も続けており、今後様々な媒体を通じて研究成果を発表していく予定である。

### 4. 研究成果

『植民地期朝鮮歴史災害データベース』の構築とその他の史料調査により、見えてきた

ことは多岐にわたるため、以下箇条書きで列挙していく。植民地下の朝鮮半島は想像を絶するほどの災害多発地帯であった、その主たるものは水害であり、朝鮮半島を流れる大河川はほとんどすべて毎年のように水害を発生していたといつてよい、季節的にも春から秋にかけてほぼ一年中、長雨や台風と連動しつつ水害は発生していた、水害の被害は甚大であり、交通機関が寸断されることもしばしばあって、その復旧活動には多大な時間と金銭を要していた、朝鮮総督府の官僚たちはその原因の究明にあたったが、そもそも近代的治水対策の基本である、水害時の水量調査・記録などが一切行われていないことに気付き愕然とした、したがって初期の水害対策はまず事態の把握と詳細な記録を作成することからはじめられた、その過程で山林の荒廃が問題視された。内地では考えられないほどの水量増加は、山林の荒廃による保水力の低下(というより南鮮の大部分はすでに山化していた)が原因であり、こうした問題は山林資源の豊富な北鮮にも及びつつあった、というのはこれらの山林内部には戸籍に登録されず、山間で焼き畑農業を行うことで生計を立てている「火田民」と呼ばれる人々が約百万人単位で存在しており、彼らの放つ火が大規模山林火災の原因となり、結果的に貴重な北鮮の山林資源を危機に追いやるようとしていた、彼らは社会における激しい差別構造や、ないしは政争に敗れるなどしたことから、現世から離脱し、山間に逃げ込んだ人々であり、李氏朝鮮がきわめて厳格な身分差別社会であったこととも相まって、歴史的にその勢力を増大してきた人々だった、したがってこの火田民問題に対処しようとするならば、これら近世朝鮮社会の「闇」と向き合い、それを抜本的に修正していく大作業が必要となった、それを律儀にも遂行しようとした齋藤実総督とその官僚たちは、朝鮮半島内の土地を調査し、遊休地の多くに彼ら火田民を入植させ、授産する方針を固めた、しかしこうした土地のほとんどが朝鮮社会の上流社会であるところのヤンパン層の所有するものであり、総督府の方針は彼らの大反発を買った、また苦しい状況下でも逃げずに耐えてきた一般の人々からも決して歓迎されなかった、そして日本国内からは植民地経営費用の増大を指摘・非難され、朝鮮総督府は窮地に立たされることとなる、ところがさらにここに大きな問題が巻き起こる、それは彼ら火田民たちの同胞で、国境を越えて中国側に不法移住している人々が、中国人の支配下で暴虐の限りを尽くされている、彼らを守ってほしいという火田民たちからの訴えによるものであった、朝鮮総督府はこの要望にも応え、この通称間島地方に総督府の出先機関を置いて、在中国朝鮮人の保護に乗り出す、そしてそのことが中国側からの内政干渉との非難を招き、さらに国際協調を重視する日本外務

省からも攻撃されることとなった、しかし本来は外務省の傘下にあるはずの現地総領事たちは、むしろ朝鮮総督府の行動を支持し、むしろ外務省の事なかれ主義を非難する行動に出る、朝鮮総督府は関東州と連携し、満鉄沿線に彼ら在中国朝鮮人たちを移住させる計画を立てるが、帯のような狭隘地ではその全部を受け入れることは不可能であり、より広大かつ日本の主権下にある土地が必要となる、こうした動きはやがて満州国成立への大きなファクターとなっていったと推定される。

かくして本研究は当初の予想を越え、よりスケールの大きな研究となった。単に自然災害の実態とそれへの対応を明らかにするだけでは終わらなくなった。その内容を明らかにするためには、本研究期間は短すぎ、とりあえず大きな見通しを立てるところまでで時間切れとなった。

以上の記述に基づき整理するならば、本研究の成果は大きく三つに大別することができるといえるだろう。

(1) 『植民地期朝鮮歴史災害データベース』の構築に代表されるように、当該期の朝鮮における災害実態を明らかにした。

(2) 自然災害問題をめぐる朝鮮総督や他の官僚たちの思想と行動を一定以上明らかにした。

(3) しかしながら、そこから派生した間島問題については、今後徹底した検討を加え、一つの研究論文として社会発信していく必要がある。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

山崎有恒「植民地期朝鮮の災害と「火田民」 - 齋藤実の見た近世朝鮮社会の「闇」 - 、『立命館文学』\*査読あり 2016年、印刷中

〔学会発表〕(計1件)

山崎有恒「植民地期朝鮮における防災と火田民 - 齋藤実が見た近世東アジア世界の「闇」」(機密費研究会、2015年3月27日、早稲田大学(東京都新宿区))、

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山崎 有恒 (Yamazaki, Yuko)  
立命館大学・文学部・教授  
研究者番号：00262056

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：